

連載 患者目線の医療安全 15

事故を風化させないためにはどうすればよいか
～群馬大学医学部附属病院に建立された「誓いの碑」の意味～

患者の視点で医療安全を考える連絡協議会 世話人 勝村 久司



事故を風化させず再発防止を誓った碑

2020年6月18日17時、今年度最初の群馬大学医学部附属病院「患者参加型医療推進委員会」が開かれた日に、「誓いの碑」(写真)の除幕式が行われました。

「誓いの碑」は、同大学病院の敷地のほぼ中央にある噴水広場に建立されただけでなく、患者が出入りする外来棟と、医療者が集う臨床講堂の壁にも同文のプレートが掲げられました。

報道では、除幕式を終えた田村遵一病院長は「医療安全の取り組みは一定の成果を出しているが、一番大事なのは事故を胸に刻み、継承していくこと。碑を前に誓いを新たに続けることで、記憶が薄れることはない」と述べて、同病院の「患者参加型医療推進委員会」に委員として参加している2人の遺族は、それぞれ「医療安全がより良くなるよう願っている」「二度とこのような事故がないことを願う。患者や遺族から感謝される医療を目指して尽力いただきたい」と声を震わせたとのこと。

忘れたくても忘れてはいけないこと

「誓いの碑」と言えば、1999年8月24日に厚生労働省の前庭(日比谷公園側から入って正面玄関手前の左側)に建立された「薬害根絶誓いの碑」を思い出します。建立のきっかけとなった薬害エイズ事件の被害者で、「東京HIV訴訟原告団」全国世話人・「はばたき福祉事業団」理事長の大平勝美さんが今年6月21日に亡くなりました。

被害の記憶は放っておくと風化してしまいます。遺族にとっても病院にとっても忘れてしまいたいほどのつらい体験だったからこそ、忘れてはいけないのです。

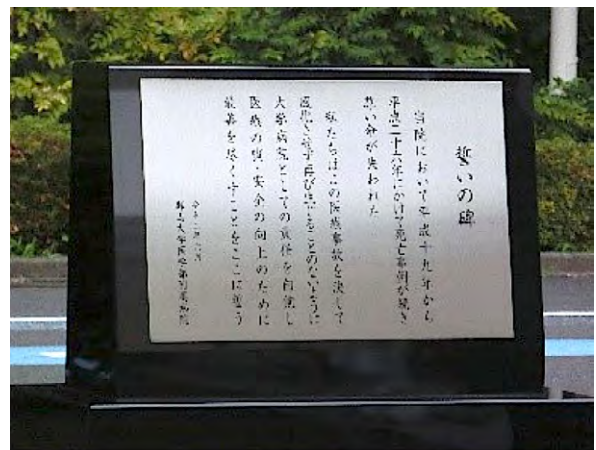
そのためにはまず、患者の命を軽視してしまう「感覚の麻痺」が起きないように、碑の建立など、命の尊さを形に表す必要があります。

しかし、その被害がどのような内容で、どのような背景・原因で引き起こされたのかまで伝えられなければ、やはり碑自体が風化していってしまうでしょう。

除幕式の日開催された患者参加型医療推進委員会では、今も同大学ホームページに掲載されている「群馬大学医学部附属病院医療事故調査委員会報告書」(<https://www.gunma-u.ac.jp/wp-content/uploads/2015/08/H280730jikocho-saishu-a.pdf>)の5章「再発防止に向けた提言」の(7)「患者参加の促進」の内容が記された70～71ページのコピーが、遺族の要望で改めて資料として配布されたとのこと。

「誓いの碑」は建立されても、その報告書で提言された再発防止のための患者参加の促進がまだ実現しているとはとても言えないからです。

早期の提言の実現こそが、「誓い」の意味ではないでしょうか。



群馬大学医学部附属病院の「誓いの碑」

(高さ約1.2m 幅約2m)

誓いの碑

当院において平成十九年から平成二十六年にかけて死亡事例が続き尊い命が失われた

私たちはこの医療事故を決して風化させず再び生じることのないように大学病院としての責任を自覚し医療の質・安全の向上のために最善を尽くすことをここに誓う